

保育教職志望学生における跳び箱運動に対する 意識に関する研究

— Gritに着目して —

A Study on the Attitudes of the Teacher Trainee Students toward Vaulting Box Exercises

— Focusing on the Grit —

胡 泰志・古谷嘉一郎・梶田 英之

EBISU Yasushi, FURUTANI Kaichiro and KAJITAI Hideyuki

This study investigated the effects of the short Grit (Grit-S) on the attitudes of preschool / elementary school teacher-trainee students toward vaulting box exercises and physical education. 62 students (23 males and 39 females) took part in the vaulting box lessons. A series of surveys was conducted on the students both before and after the lessons.

The following results were obtained. The skills of the low Grit-S group concerning the tuck vault and the forward roll on the buck were higher than those of the high Grit-S group. The high Grit-S group learned more and supported each other more cooperatively during the lessons. The self-esteem of both groups was improved during the lessons. The low Grit-S group seemed to have a need for some support to keep their motivation up.

I. 目的

平成29年に告示された小学校学習指導要領⁴⁾では、器械運動は様々な動きに取り組んだり、自己の能力に適した技や発展技に挑戦したりして技を身につけた時の楽しさや喜びを味わうことができる種目としている。この器械運動系の領域は低学年では「器械・器具を使った運動遊び」、中高学年では「器械運動」から構成されている。また、中高学年で取り扱う器械運動はマット運動、鉄棒運動および跳び箱運動から構成されている。器械運動では逆さ姿勢をとったり、空中に体を投げ出したり、回転したり、ぶら下がるなど、日常生活ではなかなか体験することのない動作を伴う。そのため、子どもたちには身体を操作する能力を求められることから、「できる」「できない」がはっきりとした運動でもある。小学校で学級担任をしている教員

138名を対象とした、器械運動指導に関する研究¹⁰⁾では、器械運動指導について不得意と意識している教員が多く存在していると報告されている。跳び箱運動に関しては、調査対象教員の約40%がやや不得意または不得意と感じていた。また、跳び箱運動の指導の難しさに関しては、調査対象教員の約60%が苦手意識を持っており、小学校での跳び箱運動指導の困難さが伺える。この傾向は教員になる前の段階からも見受けられる。小学校教諭一種免許状取得に必要な体育の授業を受講している学生126名を対象にした研究⁶⁾によると、学生の器械運動の習得状況は芳しくないと報告されている。跳び箱運動では対象学生の70%以上が習得している技は切り返し跳びグループ技と回転跳びグループ技の基本技である開脚跳びと台上前転のみであったと報告されている。さらに、跳び箱運動の授業を受講した保育教職志望大学生81名を対象とした研究²⁾では、

跳び箱の授業を受けることにより体育に関する積極的な意識や体育を教える自信が身についたものの、跳び箱運動自体を教える自信にまでは繋がらなかったことが報告されている。これらのことから、教員を目指す学生に対して、跳び箱運動に関する技能を身につけさせることは、子どもたちに跳び箱運動を教えるために重要な要素の一つであると考えられる。

「できる」「できない」がはっきりとした器械運動は、できない学生または苦手意識を持つ学生にとって、その技能取得に関して非常に困難が伴うことが予測される。そのため、小学校教諭免許取得を目指す学生には「できない」または「苦手な」ことに対して粘り強く取り組み続けることができる能力が求められる。西川ら⁸⁾は、Duckworth & Quinn (2009) が作成した8項目版のShort Grit (Grit-S) 尺度を元に、日本語版Short Grit (Grit-S) 尺度を作成した。Grit-Sは2つの下位尺度から構成されている。一つ目の「根気」尺度は勤勉性や困難に遭遇しても諦めずに取り組む力を測る尺度である。二つ目の「一貫性」尺度は一つの目標に対して長期にわたって継続して取り組む力を測る尺度である。保育教育職は免許資格取得までに多くの努力を必要とされ、また保育教育職に就いた後も継続して研鑽を求められる職業である。そのため、これら2つの下位因子を含むGritは保育教育職を目指す学生には欠かすことのできない能力を測る指標の一つであると言える。

以上のことから、本研究では保育教職志望学生を対象に、跳び箱運動の授業前後における跳び箱運動および体育に関する意識に対するGritの影響を検討することを目的とした。

II. 方法

A. 調査対象者および調査方法

研究対象者としてとしてH大学1年生80名(男子32名、女子48名)を選出した。なお、H大学では小学校教諭一種免許、幼稚園教諭一種免許および保育士資格が取得可能である。

本研究では、令和元年6月から7月にかけて、保育教職志望学生を対象とした体育の授業を利用し、跳び箱運動を4回実施した。本研究の跳び箱運動の授業で実施した主な内容は、開脚跳び、抱え込み跳び、台上

前転、およびこれらに関連する補助運動および発展技であった。跳び箱運動の授業開始前および跳び箱運動4回目の授業後に跳び箱運動に関する質問紙調査を実施した。

調査に際しては、調査内容、目的、データの取り扱いおよび、本調査が授業成績には全く影響しないことを十分説明した上で協力を依頼し、学生は自由意志に基づき無記名で調査に参加した。

B. 質問紙の内容

1. 教職に関する項目(3項目)

胡・古谷^{1,2)}のマット運動および跳び箱運動に関する質問項目を参考に、調査対象者の希望進路を尋ねた。また、回答した進路の志望の程度を「1:全くなりたくない」から「5:非常にになりたい」の5件法で尋ねた。さらに、その進路に就く自信の程度について「1:全く自信がない」から「5:非常に自信がある」の5件法で尋ねた。

2. 体育に関する意識項目(3項目)

体育の授業を教える自信、体育の授業を実施する意欲、および希望進路に就くための体育に関する努力の必要性について5件法で尋ねた^{1,2)}。

3. 跳び箱運動に関する意識項目(3項目)

跳び箱運動を教える自信、跳び箱運動の授業を実施する意欲、および希望進路に就くための跳び箱運動に関する努力の必要性について5件法で尋ねた^{1,2)}。

4. 跳び箱運動の技能に関する意識項目(3項目)

跳び箱運動の技のうち、授業内で多く実施した開脚跳び、抱え込み跳び、および台上前転を選出し、それぞれの技について技能レベルに対する認識を5件法で尋ねた²⁾。

5. Grit-Sに関する意識項目(8項目)

やり抜く力に関する質問項目として、Duckworth & Quinn (2009) が作成した、8項目版のShort Grit (Grit-S) 尺度を西川ら⁸⁾が邦訳した日本語版Short Grit (Grit-S) 尺度(8項目)を使用した。それぞれの項目について「1:当てはまらない」、「2:やや当てはまらない」、「3:どちらとも言えない」、「4:やや当てはまる」、「5:当てはまる」の5件法で尋ねた。

6. 自尊心に関する意識項目(10項目)

自尊心に関する質問項目として、Rosenberg (1965)

が作成した自尊感情尺度10項目を、山本ら¹²⁾が邦訳したものを使用した。それぞれの項目について「1：あてはまらない」、「2：ややあてはまらない」、「3：どちらともいえない」、「4：ややあてはまる」、および「5：あてはまる」の5件法で尋ねた。

7. 跳び箱の授業中における教え合いに関する意識項目 (2項目)

4回目の授業の終了後に、どの程度跳び箱の授業中にお互いに教え合ったり、助け合ったりしたかについて、「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」の5件法で尋ねた。さらに、「4：ややあてはまる」および「5：あてはまる」と回答した者に対して、教え合いの内容について自由記述で尋ねた。

8. 跳び箱運動の技能に関する自由記述項目 (1項目)

4回目の授業の終了後に、調査対象者の跳び箱運動の技能を現在より向上させるために、どのような努力が必要だと思うかについて、自由記述で尋ねた。

9. 性別および年齢

調査対象者の性別および年齢を尋ねた。

III. 結果

A. 分析対象者

調査対象者のうち、まず跳び箱運動の授業前後に実施した2回の調査に参加した学生で、なおかつ保育士・幼稚園

教諭または小学校教諭志望学生を選出した。これらの学生の中から重複回答や欠損など、回答に不備のない者のみを分析対象とした。その結果、分析対象者は62名（男子23名、女子39名）であった。このうち、保育士・幼稚園教諭志望学生は33名（男子5名、女子28名）、小学校教諭志望学生は29名（男子18名、女子11名）であった（表1）。

小学校体育では学習指導要領⁴⁾で跳び箱運動は取り扱うが、保育所や幼稚園、認定こども園では跳び箱運動の取り扱いが明示されていない^{3, 5, 7)}。そのため、保育士・幼稚園教諭志望学生は跳び箱運動に関心をもっていない可能性が考えられたため、志望進路別に体育および跳び箱運動に対する努力の必要性について比較した。その結果、保育士・幼稚園教諭志望学生と小学校教諭志望学生における、体育および跳び箱運動の必要性に対する認識には有意な差は認められなかった（表2）。これらのことから、本研究では保育士・幼稚園教諭志望学生と小学校教諭志望学生を保育教職志望学生として以下の分析を行った。

B. 授業前後におけるGrit-S得点、進路、体育、跳び箱および自尊感情に関する認識

本研究における分析対象者のGrit-Sの合計得点および下位尺度ごとの得点を表3に示した。まず、それぞれの得点の平均値を求め、平均値以上の得点の学生を高得点群（以下、高群）、平均値未満の得点の学生を低得点群

表1. 分析対象者の性、年齢および志望進路

| 志望進路 | 男 | 女 | 合計 | 年齢 (平均±SD) |
|-----------|----|----|----|------------|
| 保育士・幼稚園教諭 | 5 | 28 | 33 | 18.2±0.44 |
| 小学校教諭 | 18 | 11 | 29 | 18.3±0.48 |

表2. 志望進路別における体育および跳び箱に対する努力の必要性

| | 保育士・幼稚園教諭 (平均±SD) | 小学校教諭 (平均±SD) | F 値 (1, 60) |
|-----|----------------------|------------------|-------------|
| 体育 | 4.2±0.80 | 4.4±0.62 | 1.547 n.s. |
| 跳び箱 | 3.8±0.87 | 4.0±0.91 | 1.510 n.s. |

表3. Grit-S, Grit-S (根気) およびGrit-S (一貫性) の比較

| | Grit | | 根気 | | 一貫性 | |
|----|------|-----------|----|-----------|-----|-----------|
| | n | 平均±SD | n | 平均±SD | n | 平均±SD |
| 高群 | 29 | 28.1±2.11 | 35 | 15.2±1.26 | 35 | 13.2±1.49 |
| 低群 | 33 | 22.7±2.60 | 27 | 11.6±1.58 | 27 | 9.5±1.58 |

(以下、低群)としてこれ以降の分析を行った。

Grit-S合計得点と進路, 体育, 跳び箱および自尊感情に関する認識を表4-1に示した。進路志望の程度は跳び箱授業の主効果が認められ (F(1, 60)=8.907, p<.01), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に進路志望の程度が有意に低下していた (p<.01)。Grit-S合計得点の主効果は認められなかった。体育の授業を実施することを希望する程度は跳び箱授業の主効果が認められ (F(1, 60)=11.421, p<.01), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育の授業を実施することを希望するが有意に低下していた (p<.01)。Grit-S合計得点の主効果は認められなかった。希望進路に就くために体育に対する努力の必要性は跳び箱授業の主効果が認められ (F(1, 60)=7.259, p<.01), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育に対する努力の必要性が有意に低下していた (p<.01)。Grit-S合計得点の主効果は認められなかった。かかえ込み跳びに対する自信の程度はGrit-S合計得点の主効果が認められ (F(1, 60)=5.540, p<.05), Grit-S合計得点低群の方が高群より有意に自信をもっていた (p<.05)。跳び箱授業の主効果は認められなかった。台上前転に対する自信の程度は跳び箱授業の主効果 (F(1, 60)=20.078, p<.001) および

Grit-S合計得点の主効果 (F(1, 60)=9.026, p<.01) が認められ, 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に台上前転に対する自信が有意に高くなっていた (p<.001)。また, Grit-S合計得点低群の方が高群より有意に自信をもっていた (p<.01)。自尊感情については交互作用が認められた (F(1, 60)=5.397, p<.05)。単純主効果検定の結果, Grit合計得点低群において跳び箱授業の単純主効果が認められ (F(1, 60)=8.975, p<.01), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に有意に自尊感情が高くなっていた (p<.01)。跳び箱運動の授業中における教え合いの程度, 教えあった内容数および, 跳び箱運動の技能を現在より向上させるために必要な努力に関する自由記述数とGrit-S合計得点との関係を表4-2に示した。授業中での教え合いの程度はGrit-S合計得点の主効果が認められ (F(1, 60)=5.905, p<.05), Grit-S合計得点高群の方が低群より有意に多く教え合っていた (p<.05)。

Grit-S(根気)得点と進路, 体育, 跳び箱および自尊感情に関する認識を表5-1に示した。進路志望の程度は跳び箱授業の主効果 (F(1, 60)=8.219, p<.01) およびGrit-S(根気)得点の主効果が認められ (F(1, 60)=4.818, p<.05), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育に対

表4-1. 授業前後における進路, 体育, 跳び箱および自尊感情に関する認識とGrit-Sとの関係

| | | Grit高群 (平均±SD) | | Grit低群 (平均±SD) | | 被検者内効果 | | 被検者間効果 | |
|---------|----------|----------------|-----------|----------------|-----------|------------|------|------------|------|
| | | 授業前 | 授業後 | 授業前 | 授業後 | F値 (1, 60) | | F値 (1, 60) | |
| 進路 | 志望程度 | 4.6±.56 | 4.5±.69 | 4.4±.66 | 4.2±.66 | 8.907** | 前>後 | 1.719 | n.s. |
| | 就職自信 | 3.3±.61 | 3.5±.87 | 3.3±.84 | 3.2±.80 | .009 | n.s. | 1.079 | n.s. |
| 体育及び跳び箱 | 体育授業自信 | 2.8±.71 | 2.7±1.07 | 2.9±.82 | 2.8±.90 | 2.147 | n.s. | .083 | n.s. |
| | 体育授業希望 | 3.6±1.05 | 3.4±1.12 | 3.6±.91 | 3.2±.92 | 11.421** | 前>後 | .249 | n.s. |
| | 体育努力必要性 | 4.3±.81 | 4.1±.92 | 4.2±.64 | 3.8±.90 | 7.259** | 前>後 | 2.461 | n.s. |
| | 跳び箱授業自信 | 2.4±.94 | 2.3±1.13 | 2.7±.98 | 2.7±.85 | .599 | n.s. | 2.731 | n.s. |
| | 跳び箱授業希望 | 3.2±.93 | 2.9±1.22 | 3.2±.95 | 3.1±.97 | 3.772 | n.s. | .197 | n.s. |
| | 跳び箱努力必要性 | 4.0±1.02 | 4.0±.94 | 3.8±.75 | 3.5±.97 | 2.435 | n.s. | 3.321 | n.s. |
| 自尊感情 | 開脚跳び自信 | 3.0±.76 | 2.9±.77 | 3.1±.60 | 3.3±.73 | .169 | n.s. | 2.906 | n.s. |
| | かかえ込跳び自信 | 2.1±.79 | 2.2±.95 | 2.6±.90 | 2.7±.94 | 1.108 | n.s. | 5.540* | 高<低 |
| | 台上前転自信 | 2.2±.99 | 2.8±.60 | 2.8±.75 | 3.2±.47 | 20.078*** | 前<後 | 9.026** | 高<低 |
| 自尊感情 | | 30.6±4.93 | 30.3±5.02 | 29.8±5.35 | 31.3±5.35 | 3.149† | | .004† | |

※前: 授業前, 後: 授業後, 高: 高群, 低: 低群

† 交互作用, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

表4-2. 教え合いの程度, 教え合った内容数および自由記述数とGrit-Sとの関係

| | Grit高群 (平均±SD) | Grit低群 (平均±SD) | 被検者間効果 |
|--------|----------------|----------------|------------|
| | | | F値 (1, 60) |
| 教え合い程度 | 4.1±.75 | 3.5±1.00 | 5.905* 高>低 |
| 教え合い数 | 1.1±.82 | .9±1.30 | .343 n.s. |
| 自由記述数 | 2.4±.91 | 2.1±1.17 | 1.727 n.s. |

※高: 高群, 低: 低群

* p<.05

する進路志望の程度が有意に低くなっていた ($p<.01$)。また, Grit-S (根気) 得点高群の方が低群より有意に進路志望の程度が高かった ($p<.05$)。志望進路に就く自信の程度はGrit-S (根気) 得点の主効果 ($F(1, 60)=6.288, p<.05$) が認められ, Grit-S (根気) 得点高群の方が低群より志望進路に就く自信が有意に高かった ($p<.05$)。体育の授業を実施することを希望する程度については交互作用が認められた ($F(1, 60)=6.154, p<.05$)。単純主効果検定の結果, Grit (根気) 得点低群において跳び箱授業の単純主効果が認められ ($F(1, 60)=17.936, p<.001$)、跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育の授業を実施することを希望する程度が有意に低くなっていた ($p<.001$)。また, 授業後において, Grit (根気) 得点の単純主効果も認められ ($F(1, 60)=7.713, p<.01$)、Grit (根気) 得点高群の方が低群より体育の授業を行うことを希望する程度が有意に高くなっていた ($p<.01$)。希望進路に就くために体育に対する努力の必要性は交互作用が認められた ($F(1, 60)=9.346, p<.01$)。単純主効果検定の結果, Grit (根気) 得点低群において跳び箱授業の単純主効果が認められ ($F(1, 60)=17.987, p<.001$)、跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育に対する努力の必要性が有意に低くな

っていた ($p<.001$)。また, 授業後において, Grit (根気) 得点の単純主効果も認められ ($F(1, 60)=4.295, p<.05$)、Grit (根気) 得点高群の方が低群より体育に対する努力の必要性を有意に高く認識していた ($p<.05$)。跳び箱の授業を実施することを希望する程度は跳び箱授業の主効果が認められた ($F(1, 60)=4.224, p<.05$)、跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に跳び箱の授業を実施することを希望する程度が有意に低下した ($p<.05$)。希望進路に就くために跳び箱運動に対する努力の必要性は交互作用が認められた ($F(1, 60)=4.194, p<.05$)。単純主効果検定の結果, Grit (根気) 得点低群において跳び箱授業の単純主効果が認められ ($F(1, 60)=7.685, p<.01$)、跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に跳び箱運動に対する努力の必要性が有意に低くなっていた ($p<.01$)。台上前転に対する自信の程度は跳び箱授業の主効果が認められ ($F(1, 60)=19.097, p<.001$)、跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に台上前転に対する自信が有意に高くなっていた ($p<.001$)。跳び箱運動の授業中における教え合いの程度, 教えあった内容数および, 跳び箱運動の技能を現在より向上させるために必要な努力に関する自由記述数とGrit-S (根気) 得点との関係を表5-2に示した。授業中で

表5-1. 授業前後における進路, 体育, 跳び箱および自尊感情に関する認識とGrit-S (根気) との関係

| | | 根気高群 (平均±SD) | | 根気低群 (平均±SD) | | 被検者内効果 | | 被検者間効果 | |
|---------|-------------|--------------|-------------|--------------|------------|-------------|------|-------------|------|
| | | 授業前 | 授業後 | 授業前 | 授業後 | F 値 (1, 60) | | F 値 (1, 60) | |
| 進路 | 志望程度 | 4.7 ± .47 | 4.5 ± .61 | 4.3 ± .72 | 4.2 ± .74 | 8.219** | 前>後 | 4.818* | 高>低 |
| | 就職自信 | 3.4 ± .78 | 3.5 ± .89 | 3.2 ± .66 | 3.0 ± .65 | .145 | n.s. | 6.288* | 高>低 |
| | 体育授業自信 | 2.9 ± .68 | 2.9 ± .98 | 2.7 ± .86 | 2.5 ± .94 | 2.691 | n.s. | 2.410 | n.s. |
| | 体育授業希望 | 3.7 ± .99 | 3.6 ± .95 | 3.4 ± .93 | 2.9 ± .97 | 15.081† | | 4.257† | |
| 体育及び跳び箱 | 体育努力必要性 | 4.2 ± .79 | 4.1 ± .77 | 4.4 ± .63 | 3.7 ± 1.04 | 10.995† | | .614† | |
| | 跳び箱授業自信 | 2.6 ± .97 | 2.6 ± 1.14 | 2.5 ± .98 | 2.3 ± .78 | .732 | n.s. | .865 | n.s. |
| | 跳び箱授業希望 | 3.3 ± .95 | 3.2 ± 1.04 | 3.1 ± .92 | 2.7 ± 1.10 | 4.224* | 前>後 | 1.964 | n.s. |
| | 跳び箱努力必要性 | 3.9 ± .97 | 3.9 ± .90 | 3.9 ± .78 | 3.5 ± 1.05 | 3.799† | | .615† | |
| | 開脚跳び自信 | 3.1 ± .69 | 3.1 ± .76 | 3.0 ± .65 | 3.1 ± .80 | .380 | n.s. | .331 | n.s. |
| | かかえ込跳び自信 | 2.4 ± .81 | 2.5 ± .95 | 2.4 ± .97 | 2.6 ± 1.01 | 1.280 | n.s. | .026 | n.s. |
| | 台上前転自信 | 2.4 ± .98 | 2.9 ± .61 | 2.7 ± .78 | 3.2 ± .46 | 19.097*** | 前<後 | 2.676 | n.s. |
| 自尊感情 | 30.7 ± 4.68 | 31.2 ± 4.82 | 29.4 ± 5.67 | 30.4 ± 5.67 | 3.722 | n.s. | .629 | n.s. | |

※前: 授業前, 後: 授業後, 高: 高群, 低: 低群

† 交互作用, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表5-2. 教え合いの程度, 教え合った内容数および自由記述数とGrit-S (根気) との関係

| | 根気高群 (平均±SD) | 根気低群 (平均±SD) | 被検者間効果 | |
|--------|--------------|--------------|-------------|------|
| | | | F 値 (1, 60) | |
| 教え合い程度 | 4.1 ± .82 | 3.4 ± .97 | 8.320** | 高>低 |
| 教え合い数 | 1.1 ± 1.16 | .9 ± 1.01 | .643 | n.s. |
| 自由記述数 | 2.3 ± 1.03 | 2.1 ± 1.11 | .975 | n.s. |

※高: 高群, 低: 低群

** $p<.01$

の教え合いの程度はGrit-S (根気) 得点による主効果が認められ ($F(1, 60) = 8.320, p < .01$), Grit-S (根気) 得点高群の方が低群より有意に多く教え合っていた ($p < .01$).

Grit-S (一貫性) 得点と進路, 体育, 跳び箱および自尊感情に関する認識を表6-1に示した。進路志望の程度は跳び箱授業の主効果が認められ ($F(1, 60) = 8.915, p < .01$), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育に対する進路志望の程度が有意に低くなっていた ($p < .01$)。体育の授業を実施することを希望する程度については跳び箱授業の主効果が認められ ($F(1, 60) = 11.255, p < .001$), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育の授業を実施することを希望する程度が有意に低くなっていた ($p < .001$)。希望進路に就くために体育に対する努力の必要性については跳び箱授業の主効果が認められ ($F(1, 60) = 7.888, p < .01$), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育の授業を行うことを希望する程度が有意に低くなっていた ($p < .01$)。台上前転に対する自信の程度は跳び箱授業の主効果が認められ ($F(1, 60) = 19.423, p < .001$), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に体育に対する台上前転に対する自信が有意に高くなっていた ($p < .001$)。自尊感情につ

いては跳び箱授業の主効果が認められ ($F(1, 60) = 4.038, p < .05$), 跳び箱授業前に対し, 跳び箱授業後に自尊感情が有意に高くなっていた ($p < .05$)。跳び箱運動の授業中における教え合いの程度, 教えあった内容数および, 跳び箱運動の技能を現在より向上させるために必要な努力に関する自由記述数とGrit-S (一貫性) 得点との関係を表6-2に示した。いずれの項目においても, 跳び箱授業およびGrit-S (一貫性) 得点の主効果は認められなかった。

IV. 考察

本研究では, 4回の跳び箱の授業後に進路を志望する程度が低下していた。また, Grit (根気) 得点の低い群は進路を志望する程度も希望する進路に就く自信も低かった。保育者や小学校教員になりたいというモチベーションが低下すれば, 器械運動のような「できる」「できないが」がはっきりとした運動を続けていくことは困難になることは考えられる。一方で, 自尊感情は向上しており, 特にGrit合計得点低群において跳び箱の授業後に有意に向上していた。自尊感情と

表6-1. 授業前後における進路, 体育, 跳び箱および自尊感情に関する認識とGrit-S (一貫性) との関係

| | | 一貫性高群 (平均±SD) | | 一貫性低群 (平均±SD) | | 被検者内効果 | | 被検者間効果 | |
|---------|----------|---------------|-------------|---------------|-------------|-------------|------|-------------|------|
| | | 授業前 | 授業後 | 授業前 | 授業後 | F 値 (1, 60) | | F 値 (1, 60) | |
| 進路 | 志望程度 | 4.6 ± .56 | 4.4 ± .70 | 4.4 ± .70 | 4.3 ± .66 | 8.915** | 前>後 | .740 | n.s. |
| | 就職自信 | 3.3 ± .68 | 3.3 ± .87 | 3.3 ± .82 | 3.3 ± .81 | .038 | n.s. | .041 | n.s. |
| | 体育授業自信 | 2.9 ± .81 | 2.7 ± 1.08 | 2.9 ± .72 | 2.8 ± .85 | 1.912 | n.s. | .043 | n.s. |
| | 体育授業希望 | 3.5 ± 1.01 | 3.2 ± 1.04 | 3.7 ± .92 | 3.4 ± .97 | 11.255*** | 前>後 | .758 | n.s. |
| 体育及び跳び箱 | 体育努力必要性 | 4.2 ± .81 | 4.0 ± 1.01 | 4.3 ± .61 | 3.9 ± .80 | 7.888** | 前>後 | .002 | n.s. |
| | 跳び箱授業自信 | 2.5 ± .98 | 2.4 ± 1.01 | 2.7 ± .95 | 2.6 ± 1.01 | .568 | n.s. | 1.005 | n.s. |
| | 跳び箱授業希望 | 3.1 ± .84 | 2.8 ± 1.14 | 3.3 ± 1.04 | 3.2 ± .97 | 3.144 | n.s. | 2.471 | n.s. |
| | 跳び箱努力必要性 | 3.9 ± 1.01 | 3.8 ± .99 | 3.9 ± .72 | 3.6 ± .97 | 2.853 | n.s. | .397 | n.s. |
| | 開脚跳び自信 | 3.0 ± .75 | 3.0 ± .79 | 3.1 ± .58 | 3.2 ± .75 | .326 | n.s. | .759 | n.s. |
| | かかえ込跳び自信 | 2.3 ± .89 | 2.4 ± 1.00 | 2.5 ± .85 | 2.7 ± .92 | 1.187 | n.s. | 1.574 | n.s. |
| | 台上前転自信 | 2.5 ± 1.01 | 2.9 ± .59 | 2.6 ± .75 | 3.1 ± .51 | 19.423*** | 前<後 | .958 | n.s. |
| | 自尊感情 | 30.3 ± 5.28 | 30.7 ± 5.18 | 29.9 ± 5.01 | 31.1 ± 5.26 | 4.038* | 前<後 | .000 | n.s. |

※前: 授業前, 後: 授業後, 高: 高群, 低: 低群

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表6-2. 教え合いの程度, 教え合った内容数および自由記述数とGrit-S (一貫性) との関係

| | 一貫性高群 (平均±SD) | 一貫性低群 (平均±SD) | 被検者間効果 F 値 (1, 60) |
|---------|---------------|---------------|--------------------|
| 教え合い程度 | 3.9 ± .94 | 3.7 ± .92 | .635 n.s. |
| 教え合い内容数 | 1.0 ± .89 | 1.0 ± 1.33 | .010 n.s. |
| 自由記述数 | 2.3 ± .87 | 2.1 ± 1.27 | .975 n.s. |

は、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである¹¹⁾。そのため、自尊感情は自信につながる指標の一つとして捉えることができる。従って、単に跳び箱運動や体育に対する自信の低下が影響しているものとは考えにくい。この原因は現時点では不明であるが、やり抜く力の弱い学生に対しては、保育者または小学校教員になるためのモチベーションを維持するために何らかの働きかけが必要ではないかと考えられる。また、やり抜く力の強い学生は弱い学生に対して跳び箱運動の技能に対する自信は劣るものの、授業の中でより積極的に教え合っていた。このことは、本研究の調査時点における跳び箱運動の技能は低いものの、保育教職志望学生として、自らの指導経験の蓄積および跳び箱運動に対する自らの指導観の醸成に役立っていると言えよう。従って、やり抜く力の強い学生の自らのできる範囲で教え合いを行おうとする姿勢は、将来に渡って学び続ける教員になるために重要なポイントであると言えよう。

跳び箱運動の技に対する自信の程度に関して、台上前転において跳び箱の授業後に自信が高まっていた。このことは胡・古谷の報告²⁾と同様であった。跳び箱運動では開脚跳びの練習経験のある学生が多い一方で、この技以外の技については練習経験のある学生が少ないことが示されている⁹⁾。これらのことから、本研究において台上前転の自信が高まったことは跳び箱運動の授業を受講することによって、台上前転の練習を十分に行う機会を得たことが自信の向上に繋がったものと考えられる。

また、跳び箱運動の授業後において、体育の授業や跳び箱運動を教えることに関する意志や自信が低下していた。その一方で自尊感情が向上している傾向を示していることや跳び箱の授業後に台上前転に対する自信が高くなっていた。これらのことから、単に跳び箱運動の技能レベルに対する自信のなさが体育や跳び箱運動を教えることへの意欲に影響しているのではなく、将来子どもたちに体育や跳び箱運動を教えることの困難さを感じたためではないかと推察される。小学校教員も手本を見せる重要性を強く認識している反面、技能の手本を見せられないことにジレンマを感じている¹⁰⁾。従って、学生時代に跳び箱運動の技能を伸ばしておくことは、将来教員としての自信に繋がっ

ていくものと考えられる。また同時に、学生同士が教え合う機会を積極的に設けることも良い教員や保育者を育てていくために必要ではないかと考えられる。

V. 要約

本研究では保育教職志望学生を対象に、跳び箱運動の授業前後における跳び箱運動および体育に関する意識に対するやり抜く力の影響を検討した。保育教職を志望する学生対象の跳び箱運動の授業前後にGrit-Sおよび体育、跳び箱運動に関する意識調査を行った。その結果、以下の知見を得た。

①かかえ込み跳びおよび台上前転の技能に対する自信の程度はGrit合計得点の低い群の方が高かった。

②授業中における教え合いの程度はGrit合計得点の高い群の方が高かった。

③台上前転に対する自信の程度は跳び箱授業後に向上していた。

④やり抜く力の弱い学生に対しては何らかの働きかけを行う必要性が示唆された。

引用・参考文献

- 1) 胡 泰志・古谷嘉一郎 (2016). マット運動に対する意識に関する研究－教職志望学生を対象として－ 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, 2, 36-41.
- 2) 胡 泰志・古谷嘉一郎 (2017). 跳び箱運動に対する意識に関する研究－教職志望学生を対象として－ 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, 3, 221-229.
- 3) 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説書 フレーベル館.
- 4) 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説体育編 東洋館出版.
- 5) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館.
- 6) 中野裕史・田村孝洋 (2019). 小学校教員養成課程学生における器械運動の技の習得状況－2018年－ 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 51, 9-16.
- 7) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保

- 連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館.
- 8) 西川一二・奥上紫緒里・雨宮俊彦 (2015). 日本語版Short Grit (Grit-S) 尺度の作成 パーソナリティ研究, 24, 167-169.
- 9) 小倉晃布・長谷川晃一 (2018). 保健体育教員志望学生の幼児期・児童期の運動経験に関する一考察 - 「器械運動」受講学生へのアンケート調査から - 環太平洋大学研究紀要, 13, 1-7.
- 10) 清水清志・塩原 茂・金子伊樹・関口明宏・高橋珠実・新井淑弘 (2019). 小学校教諭の器械運動指導に関する意識について - 群馬県A市小学校教諭に対する意識調査から - 群馬大学教育実践研究, 36, 107-116.
- 11) 清水 裕 (2001). 自尊感情尺度 山本真理子 (編) 心理測定尺度集 I サイエンス社 pp.29-31.
- 12) 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 65-68.

〈キーワード〉

保育教職志望学生, 跳び箱運動, 体育, Grit, 自尊感情

胡 泰志 (現代文化学部子ども発達教育学科)
古谷嘉一郎 (北海学園大学経営学部情報学科)
梶田 英之 (比治山大学教職指導センター)

(2019. 11. 5 受理)